

中国の気象事業のありかた (II)

—日中友好協会学術代表团に参加して—

神 山 恵 三*

5. 日中気象交流について

12月8日朝わたくしたちは外交政治学会にいきました。

胡愈之副会長や斜南光理事と話をいたしました。

「……日中友好協会が学術代表团を組織したことは日中交流にとって大きな役割を果たした。学術界文化界は互いに友好を果さなければならぬ。両国の交流は一時中断したがこれは岸政府や日本反動派が中断したものである。しかし、日本人の安保斗争が高くもりあがって、根本的に状況が変わった。とくに学術界の多くの人々がその斗争に参加したこと、そしておそらくこの中にも一緒に参加されたであろうことに敬意を表す。こんごの奮闘を期待します。友好的な前進は楽観的である……」

副会長は落ち着いた調子で日中両国間の友好的な交流を語っていました。

わたくしは、こうした話合いの中で、次のようなことを発言しました。

「われわれ日本気象学会では原水爆実験に対して、他の学界にそつ先して反対運動を行い、また学会有意によるU-2型スパイ機に対しても反対運動を行ってきた、また気象労働者は安保斗争に積極的に活動してきた。そして、日中両国の国交の正常化を闘いとうろうという全国大会の声明を行った。こうした闘いの中でいまわれわれ日本気象学会員は梅雨の問題、農業気象の問題といった両国の気象界にとって共通に興味ある問題について、われわれの学会の機関紙『天気』誌などで相互討論を開いてはどうかという提案をしている。

これは全く気象学者、技術者の善意から出発している。さきほど謝先生は安保斗争がもりあがって根本的に状況が変わったといったが、そのような状況の下に、具体的に提案されている問題に積極的に交流を積み上げていくことが必要ではないか」という質問を出した。

中国気象学会での話合いのときに、結論的にいわれたことは日本気象学会から提案していることは大へん結構であるが、岸政府の中国敵視政策に続く池田政府の対中

国政策が中国敵視を改めたといえない現在では、その提案を実現することは困難であること、しかも、それによって起る不便はお互いに忍ばなければならないこと、また、それに対する責任は中国にもまた日本人民にもない、ひとえに一握りの日本の反動勢力にあるということでした。しかし、そのときまで、わたくし自身まだ充分になっとくできなかったもので、このような質問がでたのです。

このわたくしの質問に対して謝南光氏はただちに反ばくしました。

「私は素人の見解として申しあげる。安保斗争において日本国民はかがやかしい斗争をおこない、多くの成果を得たが、アメリカ帝国主義にたいして完全な勝利を得たというわけではない。これは日本国民が反動勢力の影響をとりぞいたということではない。あなたがたが革命軍事博物館でごらんになったように、気象観測機で米軍がわが領土の写真をとったり、スパイ飛行をおこなっていることが示されている。しかもこれらの軍事観測機はつねに沖縄の基地から飛びたっている。あなたがた気象学者の善意はよくわかるが、集められた資料がどのように使われるのであろうか、梅雨、農業気象は軍事的な資料でないと思うかもしれないが、梅雨がどのように、いつ、いかなる土地で降るかは、アメリカ帝国主義の侵略にとって貴重なデータである。学問は政治ときりはなすべきでないし、またきりはなせない。あなたが切り放そうと思っても気象庁長官は切りはなさない。気象庁長官は作戦において重要な位置をしめている。個人がいかなる善意をもっても、政治からのがれることはできない。これは気象学ばかりでなく素粒子論でも同じである。日本が完全に独立しなければ真の学術交流はお互いに非常な不便をしのばなければならない。わたくしはお互いが友だちであると思ったから卒直な意見を申しあげたのである。」

その後、わたくしは中国各地の革命の歴史に現実に触れる機会を得ました。わたくし自身そういった歴史についての知識がほとんどなかったということをつくづく感

* Keizo Kamiyama, 気象研究所応用気象研究部

じました。中国が列国の植民地主義とりわけ日本の軍国主義にいかにか苦しめられたか、そして封建地主、官僚資本家、軍部からひどいさく取と弾圧をうけたか、そして、それに対してようやく人民民主主義革命をかちとったということ、しかも、この血の成果を台湾を占領したアメリカ帝国主義によって再びふみにじられるようしていること、ところが最近、かって中国人民を苦しめた日本軍国主義が再びアメリカ帝国主義と軍事同盟(安保条約)を結んで中国国土をおびやかしていること、これに対して平和と民族の独立を守ろうと中国人民は断固闘う態勢をととのえているのだという現実と歴史についての知識、すくなくともひっばくした現実感にずい分かかっています。

われわれのそうした一種ノンキさが学術交流の考え方にも両国学術者の間にギャップに原因しているのではないのでしょうか。

外交政治学会での話合いの翌日の12月9日、陳毅副総理の接見を急に受けました。やく1時間半にわたって、学術交流、国際情勢、中国建設についていろいろ語られましたが、その際学術交流について次のように触れました。

「皆さんは学者であるから中国を客観的につたえて下さるでしょう。中日両国は代々にわたって友好的にやっていたいかなければならない。資料交換については実際的な手はずをとってもよいと思う。ある刊行物を停止したのは、学術者や皆さんに対処してやったのではない。研究して方法をかえたい。漁業について気象を大切なのでこの方面の資料を手はずをとりたいたいと思う。」

この談話は気象学会や外交政治学会での話合いのときよりもずいぶん調子の違うものであった。いわゆる柔らめだというような印象でありました。

一見中国気象学会や外交政治学会での中国側の気象交流に対する考え方と陳毅副総理の発言内容とはいく分違っているように感じたことは確かで、この点で団会議を開いていろいろ討論し合いましたが、前者が日中学術交流の現状を述べ、後者はその交流の方向とてだてを述べたことで本質的には違わないという確認をいたしました。

その翌日気象局をおとずれて、中央気象局代理の饒興氏たち、中央気象局の人々に会いました。陳毅副総理の接見を受け、また気象について言及されたことをわたくしはつけ加えて気象局の人達に話しました。ここでいろいろと話合いがありましたが饒局長が結論にいわれたこ

とをお伝えしましょう。

「1954年わが国の塗長望局長は日本の皆さんに卓球寄送を通じて報告した。それは日本の災害気象にとって重要なことは通知したいということからであった。これは朝鮮戦争が終ったあとわが国は日本に災害をもたらす天気の予期補助けをもたらしたいと考えていたからである。しかし、あとになって岸内閣になって日中両国の関係は悪くなり、気象交流は中断状態になってしまった。それにもかかわらず外国への気象通報は一時的なものを行っている。

われわれ中国気象工作者は日本人民に直接利益になることはやりたいたいが、気象がアメリカの軍事に利用されるということ、例えばU-2型のスパイ機が日本から飛びたっていること、これは中国人民にとって気にかかることである。つまり、アメリカ帝国主義の人為的行動は両国の関係を不可能にしている。

神山先生がいわれた梅雨、農業気象について交流しようということは考える必要があると思う。もしも、日本人民の利益にもなり、アメリカの軍事にも利用される危険がなければこれは解決し易い問題だと思う。これについては私達の方も考えてみたい。」

話合いが終って気象局の一部を参観させてもらいました。

両国間の微妙な関係や、私自身のこんどの中国訪問の目的から考えて余りに局内を根掘り葉掘りきいて廻るのをさしひかえました。

ただ、予報室にかけられた「重要天気図」という名の農業気象天気図や、気象局の裏に大きな温室があったことなどから気象業務が農業気象を根幹としているということをもざまざとみたとおぼやかしく思いました。

6. 日中気象交流いかにあるべきか

わたくしの訪中報告も終りに近づいてきました。そこで、これは「天気」に関する報告だけであってわたくしが報告しなければならない他の分野にわたることを含めたものの十分の一にも足りません。しかし許された紙面にも限りがあります。ここで日中気象交流はいかにあるべきかという私なりの意見を述べて結論をいたしたいと思えます。それは一言にしていけば「日中国交の三原則をかちとる中で具体的な交流を積み上げていく」ということです。

国交の三原則とは(1)中国を敵視しないこと、(2)二つの中国を作る陰謀をろうしないこと、(3)国交の正常化をさまたげないこと——の三つを指します。

「国交三原則をみとめなければ交流しないなんていうなら何もやる必要はない」という人がいます。こおいう人達は三原則なるものをあたかも踏絵のように考えているのではないのでしょうか、これは決して中国が交流の交換条件として出しているようなものではないのです。

この原則を踏みにじることはわれわれ日本人にとっても、大きな損害になるのです、だから、わたくし達日本人の利益のためとしても、この原則をかちとるようにしなければならぬと思います。

しかし、こういう人があると思います。

「話はわかった、しかし中国を敵視しているというが、なにも中共だけに気象通報をしなかったことがあるかね、世界中どここの国でもお取りなさい、ときわめて開放的である、気象通報を十分に知らせない中共の方がずっと日本を敵視している。」という人がその一人です。だが、安保条約の附属協定である、地位協定によって日本の気象業務は米国に提供されることになっています。

米国はキューバを目の敵にしている以上に中国を目の敵にしています。そして第7艦隊は中国の近海を哨監視の眼を光らしています。それに気象業務を提供することを条約できめているくらいだから敵視政策の一環にくり入れられていることは否認しません。こんなくびきから気象業務を開放することはわれわれの気象業務にとっても極めて有利なことです。

少なくとも今後気象観測の名のもとに中国スパイ飛行に片棒かつぐようなことのないようにすることは日中両国民にとって利益になることです。

国際会議を開くような場合必ず「二つの中国」問題が起ります。1957年の国際地球観測年専門委員会や西太平洋地域の連絡会議のときに台湾を中華人民共和国いがいのべつの独立国として取りあつかおうとしました。このとき中国代表は退席するということが問題になりました。このような話をきいてある人は、

「何も、学門の場にそんな政治の問題をもち出さなくてもよいではないか、もっと純粋に学門をやったらよいのに」というかも知れません。

しかし、密航者や無国籍者でない学者ならば必ず国家主権の保護と認承の下にその会議に出席しているはずで、自分の国家の主権がみとめられていないような会議には誰だって出席できないはずで、われわれもできません。

では、中国の学者は「二つの中国」を作るような国際会議では自国の主権がみとめられていないとどうしてふ

んがいたのでしょうか。

台湾は日清戦争によって日本が中国から奪い取ったものです。それが第二次大戦の結果日本が負けて台湾は中国に返すべきだという条文の入ったカイロ宣言を盛り込んだポッドム宣言を全面的に承認し、正式に返還しました。

そして1945年中華人民共和国は成立しました。西藏が人民主義開放が遅れていようと西藏は中国であることは確かです、それと同じように蔣介石が逃げ込んだ台湾は開放がはかっているが中国の一部であるはずで、それが武力的にか平和的にか何れかの方法で開放されるか否かは全く中国の内政問題であるはずで、

徳川幕府と明治政府との政権交代は日本の全くの内政問題であつたはずで、榎本武揚がたてこもった北海道を外国が日本と違う国であるかのようにとり扱おうとしたら、日本人はどういうのでしょうか、「内政に干渉するな」というに違ひありません、いわんや中国本土と台湾島とは本州と大島との関係以上に接近しているのです。

「二つの中国」を作る陰謀が中国人にとっていかに耐えがたいものであるか、われわれの身になって考えれば明らかなことです。

このような極めて不自然なことが行われているのはアメリカ軍が台湾を軍事占領しているからです。

この人為的な偏ばな「二つの中国」を作っている力は現に沖縄と日本本土とを分断し、われわれ日本人にかぎりない苦痛を与えているのです。

だから「二つの中国」の陰謀することは、われわれ日本人自身の独立と自由をおかす問題でもあるわけです。

しかし、こうもいう人があるかも知れません。「そんなことをいったって、台湾にもしも優秀な学者がいた場合、台湾から呼ばないのは学問に政治的圧力をかけるようなものではないじやないか」と、なるほどおおいうことではないとはいえないでしょう。だがよく考える必要があります。なぜ、そんなにも優秀な学者が6億の中国人民に背を向けているのでしょうか、彼は6億の人民からきゆ弾されている学者か、6億の人民の要求を知らない学者か、あるいは人為的な力によって無理やりに6億の同胞から切りはなされている学者かの何れかです。6億の人民からきゆ弾されている学者ならば優秀というより危険な人間であるはずで、6億の人民にとって危険な人間は9000万の日本民族にとっても危険なはずであります。また6億の人民の願望を知らないとすれば優秀な学者というより愚鈍な人間というべきでしょう。また、

もし、無理やりに6億の同胞から切りはなされているような学者であれば、6億の同胞の願望に反して行われるような国際会議には出席しようとしないうし、日本からの招きを迷惑することでしょう。

何れにしても、「二つの中国」をみとめるようないかなるくわだてに加担するようなことのないようにすることこそ日中両国の国民にとってプラスになることです。

国交の正常化をさまたげないこと、これは一つ一つ具体化問題を処理する場合にひじょうに努力を要することです。

長官が訪中されたときも、わたくしが訪問したときもともに賃金カットを受けました。いわゆる自由諸国を訪問した人の中で誰が賃金カットを受けたでしょうか。これは明らかに国交の正常化をさまたげる一つの処置であります。

これから、国交が盛んになってきて、人の往来がはげしくなりやがて若い人々の交換留学などが必ず行われるようになります。そのような状態の到来までには国交が正常化しようとする方向に少しでもマイナスになるようなことについては極力反対していかなければならない

と思います。

今まで一見余りに政治的と思えるような結論を述べてきました。しかし一人の研究者として、日本気象学会員の一員として静かに考えるときこの政治的などと思えるようなこと敢ていうことがもっとも学門に忠実なことであると思います。

学門や研究あるいは技術の向上をはかること、これらは何人のためにやるのでしょうか、われわれ全員が幸福な生活を営めるようにするためです。その反対に、不幸をもたらすような結果に向いているとすれば一体学門、研究をすること技術の向上をはかることはわれわれにとってどんな意味があるのでしょうか。

日中両国の気象交流を正しい形で発展させることは、正しい学門、技術の発展の方向に合致し、それを鼓舞することになるということを確信します。

最後にわたくしを日中友好協会学術代表団として推せんし、断えず激励して戴いた学会員に、重ねて御礼申上げると共に、今後正しい日中関係促進にお努力することをちかいます。

気象界消息

1. 台風第4号

台風第4号 (Betty) は、カロリン諸島ヤップ島の西に5月21日に発生、初めは1006mbの弱い熱帯低気圧であったが、北西に進んで、25日ルソン島の北東に達した頃最低気圧945mbを示した。26日21時頃台湾に突っかけて分裂、台湾の西に出た時は980mbに弱まった。その後弱まりながら北上、揚子江河口付近で転向、チェチェ島(済州島)付近で中心示度994mbとなり、温帯低気圧となって日本海に入ったが、ここでふたたび発達し、29日21時北海道では中心示度は980mbに下った。

この低気圧に伴う寒冷前線通過後は強風が吹き、29日から30日にかけて、関東、東北各地で大火事があった。岩手県宮古市で約80戸、田老町で約500戸、青森県八戸

市では数百戸が焼失し、岩手県、青森県でとくに損害額が大きかった。

印刷誤りの訂正について

天気, Vol. 8, No. 4 に印刷誤りがありますので訂正致します。

誤 正

p. 23 上から10行目

2. 同平均気温の平年値… 2. 月平均気温の平年値…

p. 23 上から11行目

平年差を永め

p. 23 上から3行目

持続性の有発

p. 27 下から8行目

$\Sigma(T-5^{\circ}\text{C})\dots(1)$

平年差を求め

持続性の有無

$\Sigma T(\text{但し } T > 5^{\circ}\text{C})\dots(1)$